台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 149-176
2017-03-31 收稿，2017-05-11 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.149

不「盡信書」之儒者—中井履軒的經書觀—

黑田秀教*

摘要

日本江戶時代的代表儒者中井履軒，其對《孟子》的解釋，往往有出乎傳統儒者意表的見解。傳統的儒者認為亞聖孟子的言論，全都是萬古不變的金科玉律，對此，中井履軒表示否定的態度。

此外，履軒完全否定了在經學世界中不得不有條件認定存在的鬼神之類，對於『毛詩』、『尚書』的內容也有取捨選択，達到超越儒者侷限的學問境地。從中井履軒身上，可看到江戶中期的日本，不盲目信仰經書中的內容，而是依據個人思想適當取捨經書意涵。擺脫前人的束縛，自由開展個人學問的姿態，讓人感受到近代來臨的腳步聲。

關鍵詞：江戶時代、懷德堂、中井履軒、伊藤仁齋、『孟子』

臺灣大學學術期刊資料庫

* 明道大學應用日語學系助理教授

Confucian that does not necessarily believe in all classical writings: Perspective of Riken Nankai on classical writing

KURODA Hidenori *

Abstract

There are aspects of interpretation on "Mencius" by Riken Nakai, who was the representative Confucian of the Edo Era in Japan, that would be difficult to conceive as a traditional Confucian. Proper Confucians are expected to accept all remarks made by the sage of the second order, Mencius, as axioms of immutable laws. Yet Riken evaluated the chapter on "all classical writings" as the "means" of Mencius.

Riken also completely rejected the idea that in the world of Confucianism the presence of evil must be acknowledged, even though in a limited sense. He was also selective with the contents of the "Book of Odes" and the "Shangshu", which set his scholarship as a Confucian apart from the rest. It is evident from Riken Nakai that in Japan of the mid Edo Era there was this practice of selecting classical writings as appropriate according to the individual ideology, rather than blindly believing everything in classical writing as given, as an object of worship. The stance of advancing their scholarship that is free, being released from the given restraints, was what turned out to be a faint sign of approaching modern era.

Keywords: Edo Period（江戸時代）, Kaitokudo（懷德堂）, NAKAI Riken（中井履軒）,ITO Jinsai（伊藤仁齋）, ”Mengzi”（《孟子》）

* Assistant Professor, MingDao University Depatment of Japanese studies

臺灣大學學術期刊資料庫

尽くは書を信ぜざる儒者—中井履軒の経書観—

黒田秀教*

要旨

日本の江戸時代を代表する儒者である中井履軒の『孟子』解釈には、伝統的な儒者として考え難い場面が登場する。亜聖孟子の発言は、みな万古普遍の金言として受容するのが本来の儒者であるが、履軒はそれを批判する。

また、履軒は経学の世界では限定的ながらも存在を認めなければならない鬼神の類を否定し、また『毛詩』『尚書』の内容も取捨選択するという、儒者としては一線を越えた学問に到達していた。江戸時代中期の日本では、経書を所与の信仰対象として盲信せず、その記述を自己の思想によって適宜取捨選択するという行為が生じていたことが、中井履軒から見て取れる。所与の束縛から解放され、自由の己の学問を展開する姿は、近代の微かな足音だったのである。

キーワード：江戸時代、懐徳堂、中井履軒、伊藤仁斎、『孟子』

臺灣大學學術期刊資料庫

* 明道大学応用日語学系助理教授

尽くは書を信ぜざる儒者—中井履軒の経書観—

黒田秀教

一、はじめに

孔子をして「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり[1]」とまで言わしめた、学問に従事する者の究極の目的たる「道」は、六経に在る。これこそが、時を超えて儒者に共有されていた基本的な認識である。もっとも、朱子学が興隆することで四書が六経以上の地位を占め、また陸象山や陽明学などの、自己の心を重視する学派では、六経を含む経書そのものの権威が引き下げられることもあった。しかし、六経ないし四書は基本的に「載道の書」たる聖典として、ひときわ重視され続け、正しく西洋基督教における聖書の如き存在だったのである。

そのような絶対的権威を有する書籍の記述は、現実世界の学術活動をも規律していく。ガリレイ（1564-1642）の地動説がカトリック教会によって弾圧されたのも、地動説が聖書の記述を否定するものであったからこそであり、聖典に記述されたことは、全てを受け入れることが求められる。これこそが、洋の東西を問わず、前近代における学術活動の限界であり、制約であったと言えよう。

しかし、聖典の記述は時の流れとは切り離されたものであり、固定化されている。これに対し、人の精神は時の歩みと共に変遷していく。その結果、いわゆる科学的合理主義では存在を認定し難い超常現象の如く、それが記述された古代においては「常識」とされていたことも、充分に理性や科学が発展すれば、にわかに受容し難くなるという事態が生じてくるのである。

もっとも、たとい理性では首肯し得ないことであっても、聖典に記述されている以上は、それを理屈によって立証していかなければ

[1] 『論語』里仁編「子曰、朝聞道、夕死可矣。」阮元『十三経注疏附校勘記』（嘉慶二十年重刊宋本影印、日本：中文出版社、1989 年）、5365 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

ならない。これこそが、前近代において行われていた学問の一側面であり、また前近代の前近代たる所以でもあったと言えよう。即ち、所与の信仰対象を堅持し、その再解釈によってのみ自己の思想を語ることが許されるのである。

このように考えるならば、聖典による束縛から解放された時、新時代の言論が展開されるということになる。では、江戸時代の儒者が経書に拘束されず、その記述を無視する時、如何なる思想が花開くことになるのか。本論では、『孟子』尽信書章の解釈を手掛りとし、儒者として江戸時代中後期を代表する中井履軒（1732-1817）の学問手法が、日本思想史上に如何に位置付けられるかを考えていきたい。

ここで、本論に入る前に、中井履軒について簡単に紹介しておこう。中井履軒とは、江戸時代の大坂にあった懐徳堂という儒教の学問所を代表する学者である。懐徳堂は、享保九年（1724）に大阪の町人が共同出資し、三宅石庵（1665-1730）を学主（現在でいう校長兼教授）として迎え、設立された。そして、後に二代学主となる中井甃庵（1693-1758）の尽力により、享保十一年（1726）に江戸幕府より官許を受け、幕府公認の学問所となる。履軒は、この甃庵の次男として生まれ、兄の中井竹山（1730-1804）とともに懐徳堂の黄金期を築く。この履軒の学問上における特徴としては、次の 3 点が挙げられるであろう。

① 経学：当時の日本人儒者の経学研究は、基本的に四書（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）が中心であるが、履軒は四書に加えて、『毛詩』『尚書』『礼記』『周易』『春秋左氏伝』の五経にも注釈書を作成していた。その研究水準の高さは、明治以後現在に至るまで、日本で刊行される漢文注釈書において履軒の学説が随所に参照されていることからも、明らかである。

② 史学：履軒は史伝の書にも注釈をしており、中でも『史記雕題』は名高い。現在、『史記』注釈書としては瀧川資言『史記会注考証』が必ずと言って良いほど参照されるが、実は『史記会注

臺灣大學圖書館期刊資料庫

考証』は履軒の『史記雕題』から随所に無断引用している[2]。また、日本の歴史についても多数著述を遺している。

③ 科学：履軒は西洋から伝来した西洋学術にも興味を示し、天動説と地動説との折衷的な天文観を示す模型「天図」や[3]、顕微鏡についての記録[4]、また実際に人体解剖に立ち会い、西洋医学の所見に基づいた人体図『越俎弄筆』などを作成している。『越俎弄筆』の執筆は、杉田玄白等がオランダの医学書”Tāheru Anatomia[5]”を翻訳した『解体新書』に先立つものであり、履軒は当時の日本にとって最先端であった西洋学術も、積極的に摂取していたのである。

このように、履軒とはまさに博学鴻儒と呼ぶに相応しい、当代随一の儒者であった。そして、履軒の学術にはこれから見ていくように、日本の儒教思想史上における重要な「転機」が見いだせるのである。

それでは、履軒の『孟子』尽信書章解釈を検討する前に、そもそも当該章は如何に解釈されてきたのか。その伝統的理解を次節で確認しておこう。

二、「尽信書、則不如無書」の伝統的解釈

中国における史学思想を代表する清の章学誠(1738-1801)は、「経」書なる概念の誕生について、次のように言う。

> 至於官師既分、処士横議、諸子紛紛著書立説。而文字始有私家之言、不尽出於典章政教也。儒家者流乃尊六芸而奉以為経、則又不独対伝為名也。（『文史通義』経解上[6]）

---

2 詳しくは寺門日出男「『史記会注考証』撰述に見られる非学問性：埋もれた中井履軒撰『史記雕題』」(『中国研究集刊』総第9号、1990年）を参照。

3 履軒の天文学については、湯城吉信「中井履軒の宇宙観—その天文関係図を読む」(『日本中国学会報』57号、2005年）を参照。

4 井上了「十八世紀の国産顕微鏡—中井履軒「顕微鏡記」について」(『懐徳』75号、2007年）を参照。

5 この書は、ドイツのJohann Adam Kulmus著"Anatomische Tabellen"を、オランダ語訳したものである。

6 章学誠『章学誠遺書』(中国：文物出版社、1985年)、8頁中段。

臺灣大學學術期刊資料庫

これは、「経」書とは儒家が貴んでいた書物を自ら「経」と呼称したものに過ぎないという指摘である。そもそも戦国時代において、後世の儒家が尊ぶ所の六経は、その六経という枠組みこそ存在していたものの[7]、後世の如く神聖不可侵であり、現実世界を規律するような類のものでなかったことは、かの有名な孟子の言からも明かである。

> 孟子曰、「尽信『書』、則不如無『書』。吾於武成、取二三策而已矣。仁人無敵於天下。以至仁伐至不仁、而何其血之流杵也。」（『孟子』尽心章下[8]）

ここに見える孟子の言は、自己の想定する理想上の王者にそぐわぬ記述がされていれば、『尚書』であっても信じないというものである。つまり、『尚書』に対する妄信的な価値観を有していない。これも、当時であればさほど「非常識」なことであったわけでないだろう。

しかし、六経が尊崇されるべき聖典となった漢代以後では、事情は一変する。孟子を儒家の嫡流と看做す者からすれば、孟子がいささかでも経書たる『尚書』を否定することがあってはならない。そこで、この孟子の言を、『尚書』そのものを批判したという意味以外で解釈する必要が生じる。かくして、『孟子』に注釈を施した趙岐は、次のように理解することにしたのである。

> 書、『尚書』。経有所美、言事或過、若康誥曰「冒聞于上帝」、甫刑曰「皇帝清問下」、民梓材曰「欲至于万年」、又曰「子子孫孫永保民」、人不能聞天、天不能問民、万年永保、皆不可得為書。豈可案文而皆信之哉。武成、逸『書』之篇名。言武王誅紂、戦鬬殺人、血流舂杵。孟子言武王以至仁伐至不仁、殷人簞食壺漿而迎其師、何乃至於血流漂杵乎。故吾取武成両三簡策可

臺灣中文電子期刊資料庫

7 戦国中後期のものとされる郭店楚簡『語叢一』や『六徳』に、「詩・書・礼・楽・易・春秋」という六経の名称が見える。陳偉等著『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（中国：経済科学出版社、2009年）、237、245頁。

8 焦循『孟子正義』（中国：中華書局、1987年）、959頁。

用者耳。其過辞則不取也[9]。

趙岐は、孟子が必ずしも全てを信じなくても良いとしたことは、文章のレトリックに関する問題とする。レトリックは時に表現をやり「過(す)」ぎることがある。そうした修辞に惑わされてはならないことを、孟子は戒めたというのである。確かにこのように理解すれば、孟子が経書そのものを否定したということではなくなる。

もっとも、もとの孟子言は、武王は有徳であるがために敵する者はおらず、よって凄惨な事件など起こりようがない、というものであって、レトリックは主題としていない。趙岐の解釈は、儒者として正に苦心の末の産物であると評せよう。

この趙岐の方向性は、『孟子』が四書の一つとして経書に格上げされていく宋学においても引き継がれ、朱子『孟子集注』では次のように述べられている。

程子曰、「載事之辞、容有重称而過其実者、学者当識其義而已、苟執於辞、則時或有害於義、不知無書之愈也。」

武成、『周書』篇名、武王伐紂帰而記事之書也。策、竹簡也。取其二三策之言、其余不可尽信也。程子曰、「取其奉天伐暴之意、反逆施仁之法而已。」

杵、舂杵也。或作鹵、楯也。武也言武王伐紂、紂之「前徒倒戈、攻于後以北、血流漂杵。」孟子言此則其不可信者。然『書』本意、乃謂商人自相殺、非謂武王殺之也。孟子之設是言、懼後世之惑、且長不仁之心耳。(『孟子集注』巻十四　尽心章句下[10])

ここでは、程子が「事を載するの辞」に寄せて理解し、やはり文章のレトリック問題として把握したことに、朱子も則るのである[11]。

---

9 『孟子』巻 14(四部叢刊初編経部、清内府蔵宋刊本縮印、台湾:台湾商務印館、1965 年)、115 頁。

10 『四書章句集注』(中国:中華書局、1983 年)、364-365 頁。

11 なお、『朱子語類』巻第六十一「孟子十一　尽心下　尽信書章」には、「孟子説「尽信書不如無書」者、只縁当時恁地戦鬪残戮、恐当時人以此為口実、故説此。然「血流漂杵」、看上文自説「前徒倒戈、攻其後以北」、不是武王殺他、乃紂之人自蹂践相殺。荀子云、「所以殺之者、非周人也、商人也。」」とある(『朱子全書　修訂本』16、1975 頁、中国:上海古籍出版社、安徽教育出版社、2010 年)。やはり武王が非仁の行いをするはずがないとする前提の上で、

なお、程子は実際に、自身の考えとは合致しない『尚書』の一篇を、文辞に問題があるため、「不可信」としたことがある。

> 又問、「金縢、周公欲代武王死、如何。」曰。「此只是周公之意。」又問。「有此理否。」曰、「不問有此理無此理、只是周公人臣之意、其辞則不可信、只是本有此事、後人自作文足此一篇。此事与舜喜象意一般、須詳看舜、周公用心処。『尚書』文顛倒処多、如金縢尤不可信。(『河南程氏遺書』巻二十二上　伊川先生語八上[12])

金縢篇は、周公が病に臥した武王のために、己が身代わりにならんと祭壇を設けて祈る説話であり、呪術的な要素が甚だ強い。そのような篇に対し、程子は文章について「後人自ら文を作り此の一篇に足す」と述べ、真正直に信じなくても良いとする。しかし、周公の行動そのものは「只だ是れ本と此の事有り」と述べ、「歴史的事実」であるとは認識しているのである。つまり、経書を否定するという発想に至っていないことが了解されよう。

このように儒教の世界観を瓦解させかねない孟子の「危険発言」も、単に過度の修辞を信じないとするレトリック問題にすり替えて解釈した時、それは「亜聖」の金言として活用できるのである。

時代は降り、清代において樸学全盛の時を迎えても、こうした傾向には変化がない。清朝における孟子研究の精髄たる焦循『孟子正義』を繙いてみれば、前近代の儒教において、『孟子』当該条に如何なる論点が存在し、如何なる方向で理解されていたかが、如実に把握できる。長文になるため、ここに引用することはできないが、その議論を掻い摘み適宜分段して紹介すると、次のようになる。

［経文に対して］

①「書」の定義

②「篇」の枠組み

［注文に対して］

時人の口舌表現を問題にしているのである。

[12] 『河南程氏遺書』(『二程集』、北京：中華書局、1981 年)、290 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

③「武成篇」の古文真贋論争、及び孟子が実見したテキスト問題

④殷師相伐の現実性

⑤「血流漂杵」のレトリック[13]

焦循『孟子正義』は時に趙岐の見解と違うこともあるが、当該章では趙岐の見解を踏襲する。考証のために引用された句などを削去すれば、大枠は上の通りとなり、焦循の論旨は多岐に渡るものの、しかし、それらは全て、伝統的な理解の延長線上でしかないことが理解されよう。

即ち武王は有徳の王者であるのだから、血生臭い殺戮をするはずがないという前提に基づき、更に亜聖孟子が『尚書』の記述を否定するようなことはないという所与の前提から、決して踏み出すことはない。その上で、孟子の発言の意味を緻密に「論証」していくのである。この姿勢は、正に考証全盛の時代に生きる儒者のあるべき姿とも評せよう。

なお、『尚書』のテキスト問題は極めて複雑であるが、ここで行論に必要な点に関してのみ､今古文の問題について解説しておこう。戦国時代より秦の博士であった伏生を経て伝えられたとされる『尚書』は今文であり、漢の武帝末期に、孔子旧宅より発見されたとされる壁中書に含まれていたのが古文『尚書』である。ところが、古文『尚書』は西晋の時代に散逸してしまう。そして東晋に至り、梅賾が古文『尚書』を献上するのだが、この梅賾の古文『尚書』は後に真贋論争が巻き起こり、清の閻若璩によって偽古文であることが立証される。焦循が当該条において古文真贋問題にかなりの力を割いているのも、かかる時代背景が存在する。孟子が尽信書章で言及している武成篇は偽古文にしか含まれていないため、孟子が見た武成篇は、趙岐を含めて誰も確認できていない。ちなみに、金縢篇は今文である。

以上、『孟子』研究の代表である趙岐、朱子、焦循の解釈を見て

[13] 焦循『孟子正義』(中国：中華書局、1987 年)、959-962 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

きた。そこでは、一貫して孟子の発言を万古普遍の金言へと祭り上げていることが了解されるであろう。

三、中井履軒の解釈とその特色

前節では、『孟子』尽信書章の伝統的理解を確認してきたが、では、中井履軒は如何に解釈していたのか。履軒の経学研究は、『七経雕題』から『七経雕題略』を経て、『七経逢原』に結晶しているが、その経学研究における集成である『七経逢原』中の『孟子逢原』において、次のように注をつけている。

[経文]孟子曰、尽信書、則不如無書。

[逢原]書、専指『尚書』也。意謂一部『尚書』、未可悉信据也。非泛謂記載典策。

[経文]吾於武成取二三策而已矣。

[逢原]取者、以為是也。程説、取法稍拘。

[経文]仁人無敵於天下。以至仁伐至不仁、而何其血之流杵也。

[逢原]杵、以舂粟築土。軍中不可欠之物。鹵楯之解、不当更挙。孟子所挙、是古書武成篇之文。誇周師克敵多殺之辞、勿以今之古文『尚書』別生議。孟子豈為後世開方便門者哉。[14]

履軒の逢原は、『四書集注』を踏まえた上で書かれている。それがために、議論も朱子の『集注』を下敷にしており、朱注に対する批評も多い。程朱説を否定することもしばしば見受けられ、これが履軒の思想における特色にもなっている。

もっとも、本条において注目すべきは、程朱説への態度云々ではなく、履軒が議論を展開するにあたって、その奥底に秘めている「儒者としての逸脱」である。今挙げた履軒『逢原』の当該条を一読し、これを先程まで確認してきた趙岐・朱子・焦循の解釈と照らし合わせれば、履軒が「レトリック」と「本質」との関係を議論の俎上に上げていないことに気付くであろう。履軒は「「書」とは、専ら『尚

[14] 中井履軒『孟子逢原』7 巻（大阪大学附属図書館蔵、中井履軒手稿本）、47 葉裏-48 葉表。

臺灣人學學術期刊資料庫

書』を指すなり。（傍点論者）」と断言し、レトリック問題を追放する。更に古文『尚書』の問題にしても、「孟子の挙ぐる所は、是れ古書の武成篇の文。周師敵に克ち多く殺むるを誇る辞なれば、今の古文『尚書』を以て別に議を生ずること勿れ。」と述べるように、孟子が見たテキストと後世の学者が見るテキストとはそもそも別物であるのだから、議論することに価値はないとして、切って捨てる。趙岐から朱子を経て焦循に至るまで、孟子研究の主流が大きく取り上げていた問題は、履軒にとっては全く価値がないことだったのである。

そして、注目したいのは、「周師敵に克ち多く殺むるを誇るの辞」という言い回しである。「血流漂杵」という孟子が忌避した血生臭い描写を、履軒は、武王の武威を誇らんがために書かれたものとして理解している。

しかし、先ほどまで見てきた伝統的解釈では、「血流漂杵」とは単なる「過辞（趙註）」であり、そこに武王の武功を称賛せんとする意図を読み込もうとはしない。そもそもの孟子が、かかる凄惨な有様は「不仁」であるが故に、その記述を否定していたからである。ところが、履軒はそれを「誇る」ために書かれていたとするのであるから、ここに履軒が「儒者としての逸脱」をしていることが窺えるだろう。履軒に従えば、『尚書』は不仁な行いを誇示していたことになってしまうからである。

その上で、孟子の言葉を金言に昇華せしめ、孟子に仮託することで自己の思想を語ることに対し、履軒は「今の古文『尚書』を以て別に議を生ずること勿れ。孟子豈に後世の為に方便の門を開かんかな。」と述べ、そうした思想活動を譏る。要するに、履軒は孟子の本意に基づき、『尚書』であっても盲信しなくても良いし、また『尚書』の記述にも「不仁」なこともあり得ると理解したわけである。

ただし、実は履軒の当該条における解釈は、朱子『集註』以外に、もう一つ前提にしているものがある。それは、「周師敵に克ち多く殺むるを誇るの辞」という句の出拠となる伊藤仁斎（1627-1705）で

臺灣大學學術期刊資料庫

ある。そこで、次に履軒と仁斎との思想史的脈絡について検討するために、仁斎の経学の特色について検討しておこう。

四、仁斎の治経

履軒の最初の経書注釈書である『七経雕題』中の『孟子雕題』において、当該条は次のように注記されている。

> ○「書」字、指『尚書』也。非泛謂記載典策。意謂一部『尚書』、未可悉信据也。
>
> ○程子据古文『尚書』立論、未得当。（棒線は履軒）
>
> ○杵、以舂粟築土。軍中不可欠之物。
>
> ○今取有武成、未必孟子所観武成也。註不当引。○孟子豈為後世開方便門者哉。
>
> ○仁斎云、「古武成有血流漂杵之言、蓋誇武王殺敵之多也。○按今古文『書』武成篇云、「前徒倒戈、攻于后以北、血流漂杵。」此因孟子之言、遷就其文、為紂之徒自相殺之詞、如其説、則孟子何以特挙之為不可信之証乎。○孟子所引武成、当時真書也。然纔取其二三策而已。況今之古文書。」[15]

『孟子雕題』における履軒の注を見れば一目瞭然であるが、「血流漂杵」を武王が多数の敵を殺したことを誇ってのものであると理解したのは伊藤仁斎であり、履軒はそれを引用していたのである。かつ、『七経雕題』を整理した『七経雕題略』中の『孟子雕題略』でも、ほぼ同様の記述が踏襲されている[16]。つまり、『尚書』が王者の「不仁」な行いを記述することもあるとする認識は、仁斎に由来していたのである。

履軒が引用した仁斎の言は、仁斎『孟子古義』当該条に見えるものである[17]。しかし、仁斎が履軒と異なるのは、亜聖孟子の言をあ

---

[15] 中井履軒『孟子雕題』（懐徳堂文庫復刻叢書 12、日本：懐徳堂記念会、1999年）、219-220頁。

[16] 中井履軒『孟子雕題』（懐徳堂文庫復刻叢書 12、日本：懐徳堂記念会、1999年）、303頁。

[17] 『日本名家四書註釈全書』第9巻　孟子部一（日本:鳳出版、1973年）、316-317頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

くまでも金言とするため、独自の解釈を施すという点であろう。

> 蓋天下之書、真者少、而偽者多。故務黜其偽、而後真者顕焉。若不弁真偽、而雑取旁引、以成其説、則偽者勝、而真者負。貽害斯道、不可勝言。故知道者、不患其寡、而患其不真。不知者反之、不可不審択焉。（『孟子古義』尽心章下）[18]

これは当該章に対する評語であるが、仁斎は、事物の多寡という数量的な観念に惑わされず、真偽という価値的な観念を重視すべき訓誡として、受け止める。「寡」であることではなく、「不真」であることこそ憂うべきなのである。

その上で、仁斎は、『尚書』の記述に非王道と取れる記述があったと考える。実は、仁斎のこうした傾向は、仁斎の経書観より考えれば、当然の帰結でもあった。仁斎は、その著「心学原論　并序」において、次のように言う。

> 夫隆古之久、教法未定、典籍未作、民情一、而風俗自淳、道真全、而異説未起。上不待教而導之、下不求学而至之。於是時、雖六経未作、而六経之理具在。故求六経於六経未作之先、則六経之理得焉。求六経於六経既作之後、則六経之理失焉。何也。以六経之学、本不過求於其具於心而出於天者也。（「心学原論并序」）[19]

仁斎は、そもそも六経から、恒久不変の道を得ることはできないと考える。六経が成立する以前から、道は完全な形で存在しており、六経を超越している。その道は天より出でて心に具わっているものに求めなくてはならず、後世の者が六経の中から道を得ることは困難なのである。

では、如何にすれば後世の人間は道を把握できるのか。仁斎は続けて次のように言う。

> 其始見於経、蓋肇於堯之一言、開於舜之四句、而用功之密、具

[18] 『日本名家四書註釈全書』第 9 巻　孟子部一（日本：鳳出版、1973 年）、317 頁。
[19] 『伊藤仁斎　伊藤東涯』（日本思想大系 33、日本：岩波書店、1971 年）、271 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

> 備於『学』『庸』『語』『孟』之書焉。堯之一言、允執其中、是也。舜之四句、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中、是也。而『学』『庸』『語』『孟』所謂格致誠正、明全誠身、博約一貫、尽心知性等説、皆莫非祖述夫執中精一之旨也。蓋執中精一之訓、乃万世道学之根本準則、而『学』『庸』『語』『孟』之説、皆其羽翼権衡也。苟出於此則非学也。（「心学原論　并序」）[20]

四書によって緻密な功用を学ぶことで、初めてその理を得ることができる。つまり、六経は四書の輔弼を得なければ意味のあるものではなく、六経それ自体では、不完全なものとされているのである。

なお、仁斎は六経の成立事情を歴史的時間軸の中に定位せしめることで、これに制約を与える「時間」の概念を導入し、六経より載道の書たる地位を奪い取っている。かかる発想は、あたかも章学誠の六経皆史説を髣髴とさせるかもしれない。

章学誠の六経皆史説は、六経は六経成立以前の事は記述しえても、六経成立以後の事は記述しようがないというものである[21]。そして仁斎もまた「六経を六経未だ作らざる先に求むれば、則ち六経の理得。六経を六経既に作るの後に求むれば、則ち六経の理失はる」と述べ、六経成立以後は、六経より「理」を得られないとする。

もっとも、章学誠と仁斎との六経及び「理/道」に対する観念が全く合致するわけではない。章学誠は、道もまた一陰一陽往復循環し、恒常不変のものではないという、極めて独特の観念を有している。つまり、動的な世界観を保有しており、六経以後の道は「史」によってのみ追及できるとする。そして六経も「史」であるから、学問とは「史」に外ならないと考えるのである[22]。

これに対し仁斎は、六経成立以前にすでに具わっている恒常不変

---

[20] 『伊藤仁斎　伊藤東涯』（日本思想大系 33、日本：岩波書店、1971 年）、271 頁。

[21] 章学誠『文史通義』原道上・中・下（『章学誠遺書』、中国：文物出版社、1985 年）。

[22] 章学誠『文史通義』原道上・中・下（『章学誠遺書』、中国：文物出版社、1985 年）。

臺灣大學學術期刊資料庫

の道を前提とする。つまり、静的な世界観に基づいており、格別に「史」が称揚されることはない。

さて、話を仁斎の治経に戻そう。宋学以後における四書は、程頤が「学者当に『論語』『孟子』を以て本と為すべし。『論語』『孟子』既に治むれば、則ち六経治めずして而て明かなるべし。[23]」と述べるように、六経の権威をも凌駕するものであったのだから、仁斎の六経観と四書観とはその延長線上に位置していると言えよう。なお、仁斎はその著『論語古義』の「総論」において、この程頤の言を引用している[24]。

ただし、仁斎が朱子学と異なるのは、六経に対して冷淡な姿勢で臨む点である。仁斎は最終的に『論語』『孟子』のみに価値を見いだすようになったが、その六経に対する優位性は、鬼神に関する論の中に明瞭である。仁斎は、鬼神に関する説は『論語』を正当なものと看做し、『論語』に比べより具体的に鬼神を描写する『礼記』など他の経書は、信じてはならないとする。これも皆、『論語』『孟子』において鬼神が具体的に語られていないからなのである。[25]

そして、自身が経書であると認定しない諸書は、漢儒の偽作であるとし、根拠として認めない。例として、尽信書章の記述を挙げておこう。

> 及『左氏』『公』『穀』載記等書、亦皆成於秦漢諸儒之手、不可必拠信焉。（『孟子古義』尽心章下[26]）

このように、先ず自己の見解に基づき経書の価値判断を行い、そして選別した経書に基づき思想を組み立てるというのが、仁斎学で

---

23 「学者当以『論語』『孟子』為本。『論語』『孟子』既治、則六経可不治而明矣。」（程頤・程顥『二程集』、中国：中華書局、1981 年）、322 頁。

24 伊藤仁斎『論語古義』（『日本名家四書註釈全書』第 3 巻　論語部一、日本：鳳出版、1973 年）、総論 5 頁。

25 例えば、『語孟字義』鬼神条に「鬼神之説、当以『論語』所載夫子之語為正、而不可以其他『礼記』等議論雑之也。按夫子論鬼神之説、載『魯論』者、纔数章而止、至於『孟子』、無一論鬼神者。」とある。（『伊藤仁斎　伊藤東涯』、日本思想大系 33、日本：岩波書店、1971 年、152 頁）。

26 『日本名家四書註釈全書』第 9 巻　孟子部一（日本：鳳出版、1973 年）、317 頁。

臺灣大學圖書館典藏資料庫

あった。最終的に仁斎は、『論語』『孟子』の二書と、この二書に引用される『周易』『尚書』『毛詩』、及び孔子が編纂し孟子も言及する『春秋（経）』とにより、己の「儒学」を語っていくのである[27]。

ところで、経書の価値判断と取捨選択とを行ってから学説を構築するという手法を、履軒が仁斎と軌を一にしていることは、既に平重道が指摘する通りである[28]。

また、平は履軒が「古学の精神を一そう純粋に治経に発揮した[29]」と評するが、確かに仁斎が孟子の言及せざる多寡の問題を見出すのに対し、履軒は純粋に孟子の発言のみを受け止めている。こうしたことから、平は履軒の治経を「宋明学の批判と孔孟の古意発揚が、考証学の成立を俟て初て完成するものとすれば、履軒の古註学はその前提的な意味で、古文辞学と考証学の間隙を聯結する意義と位地を保持した[30]」と位置付けている。

ただし、これは空理に流れやすい宋明理学に対し、古学が孔孟の言に立脚することを表明し、考証学がその手法として文献実証を重んじたという､あくでも治経の発展段階を基にした位置付けである。ここで顧みるべきは、宋明理学にせよ、仁斎や徂徠の古学、そしてその後の考証学にせよ、これらには、普遍的価値観が経書に存在するという所与の前提が存在していたことに、留意しなくてはならない。そして、己の信じる手法により経解して明かとなったことが、唯一の正解とされる。その先には、世界の普遍たる「道」が存在する。

ただし、仁斎はやや特殊である。確かに仁斎は道の普遍性を強調するが、それは日常の起居と須臾も離れぬ、万民にとって卑近なも

27 土田健次郎「伊藤仁斎と朱子学」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 1 分冊、1996 年)、40 頁。
28 平重道「懐徳堂学の発展（Ⅱ)」(『宮城教育大学紀要』5、1971 年)、一〇九-一一〇（212-211）頁。
29 平重道「懐徳堂学の発展（Ⅱ)」(『宮城教育大学紀要』5、1971 年)、一一一（210）頁。
30 平重道「懐徳堂学の発展（Ⅱ)」(『宮城教育大学紀要』5、1971 年)、一一一（210）頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

のであった。

若夫高遠不可及者非道。隠僻不可知者非道。何者、非達於天下万世、而不可須臾離之道也。一人知之、而十人不能知之者非道。一人行之、而十人不能行之者非道。何者、非達於天下万世、而不可須臾離之道也。（『論語古義』総論[31]）

しかし、人は多様な存在であり、画一的な性質をもっているわけではないとされる。

性生也。人其所生而無加損也。……。猶言梅子性酸、柿子性甜、某薬性温、某薬性寒也。（『語孟字義』巻之上　性[32]）

仁斎は生まれつきの性が人によって異なっていると考えており、一つの物が複数の特性を許容できるとしていた点で、特性は一律でなければならないとする朱子と、大いに見地を違うのである[33]。要するに、「性の普遍性を否定することで、あわせて人情の画一的把握から逃れようと[34]」していたのであり、だからこそ「理」という強固な普遍によって人を画一的に均質化する朱子学を批判する。

多様性を前提にしている以上、普遍という概念の後退は避けられない。聖人のようにごく一部の特殊な人間ではなく、一般的な大多数の人間が生活の中で実践できるのが「道」であるとするならば、具体的には社会通念によって万民に共有される善行が、普遍たる「道」とされることになろうが、これは「結果的な効果から道の枠組みを決定しよう[35]」という思考である。要するに、社会の中心を占める一般的大多数の感覚に依拠して価値判断を行うということになろう。

こうした方向性を更に進めたのが履軒であり、履軒は「通人」と

31 『日本名家四書注釈全書』第 3 巻　論語部一（鳳出版、1973 年）、総論 4 頁。
32 『伊藤仁斎　伊藤東涯』（日本思想大系 33、日本：岩波書店、1971 年）、134 頁。
33 土田健次郎「伊藤仁斎と朱子学」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 1 分冊、1996 年）、46 頁。
34 土田健次郎「伊藤仁斎と朱子学」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 1 分冊、1996 年）、46 頁。
35 土田健次郎「伊藤仁斎と朱子学」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 1 分冊、1996 年）、45 頁。

臺灣人學學術期刊資料庫

いう大多数の良識を保有せる一般人の視点から、経書解釈を行うことがある[36]。ここに至り、「万民」に共有されるべき普遍という視座すらも忘却され、極端な人間を除外した上で学説が構築されていく。つまり、仁斎も履軒も、世界全体を貫徹する「普遍」を必ずしも必要としないという発想を共有しており、履軒は更にそれを推進めていたと評せよう。

そして、こうした「普遍」の忌避は、履軒や竹山の学説には随所に見られるのである。

五、普遍に対する忌避

履軒は朱子学の性説を批判し、「性即理」を否定する[37]。しかし、自身が否定した理論に対し、存在価値がないとはしない。

> 性即理也、元来機鋒之言矣。理字何曽有此等義哉。是一家之私言。非可通乎天下古今者。在其流派者、私講之、可也。不得采入于経解。（『孟子逢原』告子第六[38]）

履軒は、「私」の学というものを認め、それを講ずることは構わないとする。その「私」の学とは、孔孟の考えではないが、孔孟の後学が樹立した独自の見解であり[39]、故に経解に用いることは許されないが、その価値は否定されないのである。

これは、突き詰めて考えてゆけば、学説とは複数あることを認めるという発想であり、その延長線上には諸学が並列に配置されていく。つまり、絶対的な唯一の「普遍」ではなく、個々の「特殊」を相対的に扱うという思考である。こうした態度は、仁斎や徂徠、そして考証学には見られないものである。

この履軒の普遍を廃し、物事を相対的に把握するという態度は、

---

[36] 市来津由彦等編『江戸儒学の中庸注釈』（東アジア海域叢書５、汲古書院、2012 年）、239-240 頁。

[37] 詳しくは藤居岳人「中井履軒の性論―伊藤仁斎・荻生徂来の所説と比較して―」（『懐徳堂センター報 2007』、2007 年）を参照。

[38] 中井履軒『孟子逢原』6 巻（大阪大学附属図書館蔵、中井履軒手稿本）、11 葉表。

[39] 平重道「懐徳堂学の発展（Ⅱ）」（『宮城教育大学紀要』5、1971 年)、一一〇（211）頁。

臺灣大學學術資料庫

儒教の枠組みすら越えていく。例えば、鬼神に関する言説では、次のように述べる。

> 履軒先生曰、「……。祭祀・鬼神ノコト人情ニ従フテ有トスレバ，邪教ノ鬼神モナシト云ガタシ。又吾イハユル鬼神ハ実ニアリテ、彼レイハユル鬼神ハナシトイハバ，コレ無理ナリ。」（山片蟠桃『夢の代』[40]）

通常の儒者であるならば、孔孟の教えという、それすら一種の「信仰心」とも呼びうる所与の前提に基づき、儒教以外の鬼神を否定しそうなところであるが、履軒はそうしない。鬼神の存在とは、理屈では立証し難いものであるが、履軒はその事情を認めた上で、自己の信奉するものと「邪教」とを同等に取り扱い、諸宗を相対的に把握しようというのである。

ところで、自己の見解を優先し、それに合わせて経書を取捨選択するという行為は、あたかも「六経皆な我が註腳なり[41]」と述べた陸象山や、良知を主張し、経書を含む己の心の外部に普遍的理を認めなかった陽明心学が想起されるだろう。確かに仁斎も履軒も、そして陸王も、「性即理」という朱子学の根本を批判する[42]。そして、硬直化した天理の支配から人間の心を解放し、道徳的実践を重視していく。人間個々人の心を重視すれば、相対的に心の外物である経書の地位が低下するのも必然と言えよう。こうした一面に注目すれば、仁斎や履軒の経書への眼差しは、陸王学の延長線上に位置するのかもしれない。井上了は旧注や伝文、更には経文への批判を大胆に行う履軒の治経を、朱子学というよりは北宋学の傾向を継承し発展させたものではないかとしている[43]。

しかし、陸王は確かに個々人の心を重視し経書の地位を相対的に

---

40 『富永仲基 山片蟠桃』（日本思想大系 43、日本：岩波書店、1973 年）、515 頁。

41 「六経皆我註腳。」陸象山『象山語録』巻 34（台北：台湾中華書局、1966 年）、2 頁。

42 仁斎と履軒とにおける性説及び朱子との相異は、藤居岳人「中井履軒の性論—伊藤仁斎・荻生徂来の所説と比較して—」（『懐徳堂センター報 2007』、2007 年）に詳しい。

43 井上了「中井履軒の『春秋』観」（『懐徳』73 号、2005 年）、52 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

低下せしめたが、一方で、「普く」天下の人の心に理が完全に具わっているとし、全人類を統合する普遍的であり唯一の学問体系を打ち立てようとしていた点には留意が必要である。

これに対して、仁斎や履軒は先ほども言及したように、全人類を統合する理論の樹立とは、真逆の方向性へと進む。あくまでも一般社会の大多数に通用する道徳を儒教に見いだせればよかったのである。

なお、仁斎と履軒とにおける治経の方向性はおおむね一致するとは言っても、履軒の方がより自己の思索に従い、経を操作していくという違いがある。

仁斎は『論語』『孟子』を殊更重視するとは言っても、『尚書』『毛詩』を軽んずることはせず、その記述を否定したり取捨選択したりするようなことはしない。せいぜいが偽古文の排除を唱えるくらいである[44]。つまり、孔孟の学ぶところである『詩』『書』は、そのまま受容する。

これに対し履軒は、『詩』『書』すらも取捨選択を行っていく。履軒の経学研究は『七経逢原』に大成されたが、その『七経逢原』に収められる「経書」の枠組みは、履軒が取捨選択した結果のものであり、『七経雕題略』までにはそうした傾向が然程無かったことから様相を一変させる。例えば礼学であれば、『七経雕題略』までは『礼記』が含まれていたが、『七経逢原』では『礼記』が排除される[45]。そして『夏書逢原』では、『尚書』から周書が排除され、『古詩逢原』でも詩の削去が行われるに至る。こうした行為が、六経に世界の道理が定められているとする儒教の「世界観」を破壊するものであることは、言うまでもない。世界を規律する六経の編纂は、聖人にのみに許されることであって、一介の儒者が行って良いものではない。仁斎はそうした行為にまでは踏み込まなかったが、

44 伊藤仁斎『語孟字義』巻の下「書」「詩」などを参照。

45 『七経雕題』『七経雕題略』『七経逢原』における出入は、湯浅邦弘編『増補改訂版　懐徳堂事典』（日本：大阪大学出版会、2016 年）を参照。118-121 頁。

臺灣人文藝術期刊資料庫

履軒は遂に足を踏み入れていったのである。

しかも、経文の改竄も、特に根拠を示さずに断行する。

［経文］其勢亦猶是也。

［逢原］勢亦之勢、旧誤作性。今試改正。（『孟子逢原』告子第六[46]）

自筆本では改めた箇所は赤字で記されているが、「改正」する根拠は提示しないのである。こうした改訂は、履軒の解経では枚挙に暇が無い。

ところで、かかる行為について、履軒は『七経逢原』中の『毛詩』に関する著述である『古詩得所』の冒頭において、次のように言っている。

余不自量、既削詩矣。雅頌之混淆、亦頗釐正焉。故以得所命篇云、嗟予何人、敢僭聖之業乎哉。蓋欲以典学者講明焉、質諸識者、要其帰耳。（『古詩得所』[47]）

履軒は、自身が六経の記述内容を取捨改竄していることについて、それが本来は許されない行為であると自覚していたのである。聖人に非ざる市井の学者が妄りに六経を削定することは、経学の大前提を否定することであり、聖人の道は六経にあるという儒教の「世界観」を破壊する行為にほかならない。しかし、履軒はその事件性を俯瞰的に認識した上で、己の学問を営んでいた。

これは要するに、己の学問の性質について、履軒は客観的に把握していたとも言えよう。換言すれば、他者の目線を持ち合わせていたのである。その先に、諸思想を相対的に排列するという思考が生ずるのだが、これは極めて近代的な発想法と評せよう。自己の学説を自我の没入対象とし、かつそれが「普遍」であると信じてやまぬのが前近代的な「学者」であり、他方、自己の人格と自己の学説とを切り離し、学説の多様性を前提とするのが近代の「研究者」であ

46 中井履軒『孟子逢原』6 巻（大阪大学附属図書館蔵、中井履軒手稿本）、3 葉表。

47 中井履軒『古詩得所』（大阪大学附属図書館蔵、中井履軒手稿本）、1 葉表。

臺灣大學學術期刊資料庫

るとするならば、履軒は確かに近代的な「研究者」に近付いていたと言えよう。

もちろん、『論語』『孟子』という経典から直接的に読み取れることを至上とし、理気論などの後世の学説はそれより下等に排列するあたりは、やはり前近代的な性格を色濃く遺している。また、考証学に比すれば、自己の思念を過信し、学術の客観性という点でも、やはり前近代の性質が強い。しかし、「普遍」的な価値観を設定せず、諸事を相対的に排列し、個々に評価するという方向性は、理学より古学、考証学へと至る「普遍」に拘る発展過程と、また異なった近代化の道を歩んでいたと考えられよう。

ところで、竹山は学術の発展について、次のように語っている。

> 愚ノ篤ク程朱ヲ信ズルハ、全体本領ノ所ニアリ。経説ニ於テハカツテ回護セズ。モシ後儒ノ説ニ取コトアリテ、実ニ経旨ニ叶ヒナバ、程朱モ地下ニテ喜アルベシ。豈我説ニ畔クトテ怒アルベケンヤ。コレ大賢ノ心ナリ。（『竹山国字牘』上巻「答斎藤高寿」[48]）

竹山は朱子学を守護する立場で言論活動をしていたが[49]、しかし、程朱の学説を更新していくことは、程朱も喜ぶことだと考えていたのである。なお、師説の更新については、国学者の本居宣長（1730-1801）も同様の見解を有していたことは興味深い[50]。また、懐徳堂の批判対象でもあった徂徠学派でも、徂徠に対し、高弟の双璧たる太宰春台や服部南郭が時に批判し、時に師説を限定している[51]。

こうしたことから、18 世紀の日本では、師説を墨守するのではな

---

48 中井竹山『竹山国字牘』上巻（懐徳堂遺書、懐徳堂記念会編、日本：松村文海堂、1911 年）、28 葉裏。

49 竹山の朱子学擁護とその特色とについては、藤居岳人「中井竹山の儒者意識—その経学研究を手がかりとして—」（『懐徳堂研究』第 3 号、2012 年）を参照。

50 宣長の賀茂真淵批判及び師説の更新については、樋口達郎『国学の「日本」その自国意識と自国語意識』（日本：北樹出版、2015 年）、第四章「歌の本体—宣長の歌解釈—」三節「「学び」の実相」に詳しい。

51 揖斐高「擬古論——徂来・春台・南郭における模擬と変化——」（『日本漢文学研究』4 号、2009 年）を参照。

く、意識的に刷新していくことが重要であるとする学術観が、著名な思想家たちに共有されていたことがわかるのである。しかし、仁斎、春台、南郭が経の内容を「改竄」することはなく、また宣長が『古事記』などを恣意的に「改竄」するようなことはない。これは、やはり所与の聖典であるという意識があったためであろう。ところが、履軒は聖典であっても己が意で改竄し、また気に食わぬ経書には「尽く書を信ぜざる」態度で接していった。所与の束縛から解放されつつあったその姿は、近代の微かな足音だったのである。

六、おわりに

以上、本論では中井履軒の『孟子』尽信書章の解釈を手がかりに、履軒の経書観と治経の手法とについて検討してきた。履軒は、孟子の発言に対し忠実に解釈することを是とし、別の意義を読み込むことを非とする。そして、自己の判断に従い、経書を選別改竄するという行為も手掛けていたが、しかし、それが儒者としては許されないことであるとも自覚しており、自己の学問を俯瞰的に掌握していた。

また、世界を貫徹する普遍的原理の存在に拒否反応を示し、物事を相対的に把握し、自己と異なる信仰や思想もいたずらに排斥していなかった。ここに、近代的な研究者への萌芽が見いだせるのである。

ところで、聖典の再解釈ではなく、聖典そのものを操作し、時に否定していった結果、履軒はどのような学説を生み出しえたのであろうか。本論の最後に、その主要なもの三つ紹介しておこう。

その第一は、やはり「無鬼論」であろう。経学では、怪異が経解に登場するため、怪異の存在を「立証」しなくてはならない。故に朱子も具体的に、『朱子語類』巻六十三中庸二や巻三鬼神などで、『春秋左氏伝』に登場する伯有の厲鬼等について理論的説明をして

臺灣大學學術期刊資料庫

いく[52]。

ところが、履軒を始めとする懐徳堂諸儒は、無鬼論を主張し、怪異の類を全面的に否定していく。

> 履軒先生曰、程朱説鬼神之理、可謂明明快快、唯論人鬼処、有査滓。夫申生之霊、伯有之厲、『左氏』之妄耳。乃謂是別一般道理、天下豈有別的道理哉。孟子云、「尽信書、弗如無書」。(『弁怪』吾庠先哲遺文[53])

履軒が尽信書章を見事に活用していたのが見て取れるであろう[54]。

第二としては服喪説が挙げられよう。履軒は、50歳以後と思われる時期に「擬服図」という独創的な服喪制度を作成しているが、これは現世の一切の束縛を離れ、履軒が自由に作成したものである。そうした状況で儒者が作成するのならば、『儀礼』や『礼記』などに基づき、儒教の礼学を基本にするのが当然であろう。

ところが、履軒は儒教の礼制とは異なっている日本制をベースにして作成する。そこにおいて履軒は、「子　三月」「姪　二月」とするのだが、実はこれは『礼記』檀弓上篇の「喪服、兄弟の子は、猶ほ子のごとくするなり。蓋し引きて而て之を進むるなり。[55]」という儒教の礼学思想―延いては家族倫理を、否定したものなのである[56]。

---

52 例を挙げておく。「伯有為厲之事、自是一理、謂非生死之常理。人死則気散、理之常也。它卻用物宏、取精多、族大而強死。故其気未散耳。(巻三　鬼神)」「光祖問、「先生所答崧卿書云云。如伊川又云、『伯有為厲，別是一理。』又如何。」曰、「亦自有這般底。然亦多是不得其死、故強気未散。要之、久之亦不会不散。如漳州一件公事、婦殺夫、密埋之。後為祟、事才発覚、当時便不為祟。此事恐奏裁免死、遂於申諸司狀上特批了。後婦人斬、与婦人通者絞。以是知刑獄裏面這般事、若不与決罪償命、則死者之冤必不解。」又曰、「気久必散。人説神仙、一代説一項。漢世説甚安期生、至唐以来、則不見説了。又説鍾離権呂洞賓、而今又不見説了。看得来、他也只是養得分外寿考、然終久亦散了。(巻三　鬼神)」『朱子全書　修訂本』14(中国：上海古籍出版社、安徽教育出版社、2010年)、166-167頁。

53 並河寒泉『弁怪』(佐野大介「並河寒泉『弁怪』翻刻（四)」、『懐徳堂センター報 2008』、2008年、66頁)。

54 履軒の無鬼論については紙幅の都合もあり、詳細は別稿に譲りたい。

55 「喪服、兄弟之子、猶子也。蓋引而進之也。」『礼記』(阮元『十三経注疏附校勘記』、嘉慶二十年重刊宋本影印、日本：中文出版社、1989年)、2789-2790頁)。

56 履軒の服喪説については、黒田秀教「中井履軒的喪服説之変遷―《服忌図》

臺灣大學 非印賣用

第三に、孝と穢との問題が挙げられる。儒教の根幹である孝と、日本の根強い風習であり神道において殊更注意される穢の観念とは、実は相容れない。これは、死体となれば、父母であってもこれを忌むべきものとして取り扱うためである。よって、若林強斎や初期の履軒は葬儀の次第において死穢を語ることについて意図的に避けた形跡があり、また佐藤一斎は明瞭に死穢の観念を不孝として譏った。要するに、儒教は日本の死穢の観念と全く親和しないのである。ところが、先程も言及した履軒後年の作である「擬服図」では、履軒は死穢の観念を受容しており、儒者として一線を踏み越えていったのであった[57]。

以上、論者が今まで手掛けてきた履軒研究から紹介したが、そのいずれもが尽く書を信ずれば生み出されなかったものなのである。

参考文献

1.単行本

『論語』(阮元『十三経注疏附校勘記』嘉慶二十年重刊宋本影印、日本：中文出版社、1989 年)

『礼記』(阮元『十三経注疏附校勘記』嘉慶二十年重刊宋本影印、日本：中文出版社、1989 年)

『孟子』巻 14（四部叢刊初編経部、清内府蔵宋刊本縮印、台湾：台湾商務印館、1965 年）

陳偉等著『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（中国：経済科學出版社、2009 年）

程頤・程顥『二程集』（中国：中華書局、1981 年）

陸象山『象山語録』（台北：台湾中華書局、1966 年）

朱熹『四書章句集注』（中国：中華書局、1983 年）

〈擬服図〉成立過程―」（『経学研究集刊』第 16 期、2014 年）を参照。

[57] 儒教の孝と日本の穢との問題は、黒田秀教「神儒の分水嶺―死穢と孝と」(『中国研究集刊』総 60 号、2015 年）を参照。

臺灣人文與藝術期刊資料庫

朱熹『朱子語類』(『朱子全書　修訂本』、中国：上海古籍出版社、安徽教育出版社、2010 年)
章学誠『章学誠遺書』(中国：文物出版社、1985 年)
焦循『孟子正義』(中国：中華書局、1987 年)
伊藤仁斎『孟子古義』（『日本名家四書註釈全書』第 9 巻　孟子部一、日本：鳳出版、1973 年)
伊藤仁斎『論語古義』（『日本名家四書註釈全書』第 3 巻　論語部一、日本：鳳出版、1973 年)
伊藤仁斎『語孟字義』(日本思想大系 33『伊藤仁斎　伊藤東涯』、日本：岩波書店、1971 年)
中井竹山『竹山国字牘』上巻（懐徳堂遺書、懐徳堂記念会編、日本：松村文海堂、1911 年)
中井履軒『孟子雕題』(懐徳堂文庫復刻叢書十二、日本：懐徳堂記念会、1999 年)
中井履軒『古詩得所』(大阪大学附属図書館蔵、中井履軒手稿本)
中井履軒『孟子逢原』(大阪大学附属図書館蔵、中井履軒手稿本)
中井履軒「擬服圖」(大阪大学附属図書館蔵『服忌圖』、中井履軒手稿本)
並河寒泉『弁怪』(佐野大介「並河寒泉『弁怪』翻刻（四)」、『懐徳堂センター報 2008』、2008 年)
市来津由彦等編『江戸儒学の中庸注釈』(東アジア海域叢書５、汲古書院、2012)
樋口達郎『国学の「日本」　その自国意識と自国語意識』(日本：北樹出版、2015 年)
湯浅邦弘編『増補改訂版　懐徳堂事典』(日本:大阪大学出版会、2016 年)
山片蟠桃『夢の代』(『富永仲基 山片蟠桃』(日本思想大系 43、日本：岩波書店、1973 年)

2.論文

平重道「懐徳堂学の発展（Ⅱ)」(『宮城教育大学紀要』5、1971 年)

臺灣大學學術期刊資料庫

寺門日出男「『史記会注考証』撰述に見られる非学問性 : 埋もれた中井履軒撰『史記雕題』」(『中国研究集刊』総第 9 号、1990 年)
土田健次郎「伊藤仁斎と朱子学」((『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 1 分冊、1996 年)
湯城吉信「中井履軒の宇宙観―その天文関係図を読む」(『日本中国学会報』57 号、2005 年)
井上了「中井履軒の『春秋』観」(『懐徳』73 号、2005 年)
藤居岳人「中井履軒の性論―伊藤仁斎・荻生徂来の所説と比較して―」(『懐徳堂センター報 2007』、2007 年)
井上了「十八世紀の国産顕微鏡―中井履軒「顕微鏡記」について」(『懐徳』75 号、2007 年)
揖斐高「擬古論――徂来・春台・南郭における模擬と変化――」(『日本漢文学研究』4 号、2009 年)
藤居岳人「中井竹山の儒者意識―その経学研究を手がかりとして―」(『懐徳堂研究』第 3 号、2012 年)
黒田秀教「中井履軒的喪服説之変遷―《服忌図》〈擬服図〉成立過程―」(『経学研究集刊』第 16 期、2014 年)
黒田秀教「神儒の分水嶺―死穢と孝と」(『中国研究集刊　称号』総 60 号、2015 年)

臺灣大學學術期刊資料庫

編輯室報告

1. 本期投稿數共 13 篇（校外稿 12 篇，校內稿 1 篇），經審查通過者共計 8 篇（校外稿 7 篇，校內稿 1 篇）。本期通過率為 61.5%。
2. 本期刊每年於 6 月 30 日及 12 月 31 日各發行一期。歡迎從事日本文學、日語語言學（含日語教學）、日本文化（社會科學除外）研究者踴躍投稿。
3. 台大出版中心電子期刊：http://ejournal.press.ntu.edu.tw/
4. 台大日本語文研究期刊網址：
   http://www.japan.ntu.edu.tw/japan-ch/kenkyuu.php

本期刊獲 98-103 年度科技部人文社會科學研究中心 THCI Core

本期刊收錄於科技部人文社會科學研究中心 2016 台灣人文學核心期刊 THCI 第一級

本期刊獲 106 年度國立臺灣大學學術性期刊補助編輯費用

臺灣大學學術期刊資料庫

《台大日本語文研究》投稿規定

1. 資格：凡從事日語語言學（含日語教學）、日本文學、日本文化研究者皆可投稿。每次投稿每人以一篇為原則，且不得一稿兩投。
2. 內容：關於日語語言學（含日語教學）、日本文學、日本文化（社會科學除外）等未公開發表之論文。使用文字限日文。恕不接受碩博士論文改寫之論文。
3. 樣式、繳交份數及審查費：
   A4 大小橫寫 Word 原稿。審查費 2,000 元以現金袋掛號繳交。
   （1） 原稿（記名原稿乙份，不記名原稿三份，電子檔以 e-mail 寄送）
   請將以下的項目依順序，全部以 30 字×30 行×30 頁以內（含中、英、日文摘要）格式排版。
   ①中、英、日摘要與關鍵詞（至多五個）
   ②作者所屬單位職稱（中、英、日文，僅限記名稿件）
   ③論文名稱（請加註英文之論文名稱）
   ④作者姓名（中、英文，僅限記名稿件）
   ⑤本文　　本文（含圖表）
   　　註（隨頁註）
   　　參考文獻、資料
   ※ 無記名之原稿中請避免列出姓名、單位職稱等與作者本身相關之資料，謝辭等文字於審查階段中請勿列入本文。
   ※ 電子檔請另以 E-mail 寄到 ntujpstudies@gmail.com，在主旨請註明為「台大日本語文研究第○○期投稿」
   （2） 附件（一份）
   請書明論文名稱、作者姓名、所屬單位、職稱、聯絡方式（地址、電話、傳真、電子郵件）。若為共同執筆，請明確寫出聯絡代表者。
   稿件內涉及版權部分，請事先取得原作者或出版者書面同意，本刊不負版權責任。
   （3） 著作授權同意書（中、英文各一式兩份）
   可至本系出版刊物網頁（http://www.japan.ntu.edu.tw/japan-ch/kenkyuu.php）下載。
4. 稿件寄送處：106 台北市羅斯福路四段一號　台大日文系辦公室
   （不論是否刊登，所繳交之稿件一律不退還，請自行備份）
5. 審查：編輯委員會原則上由本系及外校之學者專家組成，所有稿件先經由本刊編輯委員會初審，通過後送交三位相關領域之專家學者複審決定是否刊登。審查意見分為三種：1.刊登，2.修改後刊登，3.不刊登。
6. 本期刊於每年 6 月 30 日及 12 月 31 日發行，一年二期。截稿日（每年 3 月 31 日及 9 月 30 日）後舉行編輯委員會進行審查，惟稿件不及於當期刊登者則併入次期刊登之。
7. 刊登者贈送抽印本 20 份及期刊 3 冊，不另致酬。
8. 本刊刊載之論文，非經本系同意，不得轉載至其他刊物。
9. 本刊為國立臺灣大學出版中心出版之學術期刊，除印行紙本之外，同步收入國立臺灣大學出版中心所建置的國立臺灣大學學術期刊資料庫，進行電子出版，來稿需同意同步電子出版方能採用。

國立臺灣大學學術期刊資料庫

聯絡處：台大日文系　電話：02-3366-2792　FAX：02-2362-1874　E-mail：ntujpstudies@gmail.com

《台大日本語文研究》論文格式

※A4 大小紙張、橫寫、Word 檔原稿、30 字×30 行×30 頁以內（含中、英、日文摘要各一頁）

餘白：上下各 2.54cm　　左右各 3.17cm

※請依下列字體格式書寫

		本文及其他	小標題
Windows Word (檔名.doc)（檔名請使用英文書寫）	日文	MS　Mincho	MS　Gothic
	中文	新細明體	中黑體
	英文	Times New Roman	Arial
	數字	Times New Roman	Arial

1.中、英、日文摘要與關鍵詞（作者姓名、所屬單位職稱僅限記名原稿）

2.內文

論文名稱：14p「Gothic 体」置中

作者姓名：12p「明朝体」置中（僅限記名原稿）

本文（圖表、注、參考文獻、資料）

本文：12p「明朝体」

注：10p「明朝体」（請使用 Word 中的「註腳」功能、隨頁注）

參考文獻內容：12p「明朝体」

資料：12p「明朝体」

摘要書寫範例如下：

中文題目（中黑體 14p、置中）

（空一行）

作者姓名(新細明體 12p)*（插入註腳）

（空一行）

摘　要（新細明體 14p、置中）

（空一行）

摘要內文(新細明體 12p)……

……..……

……。

（空二行）

關鍵詞：第一個　第二個　第三個　第四個　第五個

*作者所屬單位職稱（新細明體 10p）

臺灣大學學術期刊資料庫

英文題目（Arial 14p、置中）

（空一行）

作者姓名（Times New Roman 12p）*（插入註腳）

（空一行）

Abstract（Times New Roman 14p、置中）

（空一行）

摘要內文(Times New Roman 12p)……

……...…

……。

（空二行）

Key words: 第一個　第二個　第三個　第四個　第五個

*作者所屬單位職稱（英文）（Times New Roman 10p）

日文題目（MS Gothic 14p、置中）

（空一行）

作者姓名（MS Mincho 12p）*（插入註腳）

（空一行）

要　旨（MS Mincho 14p、置中）

（空一行）

摘要內文(MS Mincho 12p)……

……...…

……。

（空二行）

キーワード：第一個　第二個　第三個　第四個　第五個

*作者所屬單位職稱（日文）（MS Mincho 10p）

臺灣大學學術期刊

＊ 論文名稱與作者姓名之間空一行。
＊ 作者姓名與本文之間空一行。
＊ 標題 12point「Gothic 体」，子目次序請依下列方式標明
第一章、第一節、第一項、…… → 一、(一)、1、(1)
＊ 僅於章與章之間空一行。
＊ 分段與引文：
中文論文每段第一行第一個字空二格，引用文每行空三格。
日文論文每段第一行第一個字空一格，引用文每行空二格。
引用文與本文間無需空行。
＊ 圖表內的文字盡可能比照本文，與本文之間原則上空一行。
＊ 參考文獻（12point「Gothic 体」）
＊ 參考文獻內容（12point「明朝体」）
文獻按 abc 字母人名或年代順序排列；專書按著者名或編者名、出版年代、書名、版、(出版地)、出版社、頁數排列；論文按著者、出版年代、論文名、刊載書名、卷號、(出版地)、出版社、頁數排列。惟論文集同專書。

參考文獻書寫範例如下：

參考文獻

赤羽研三（1998）『言葉と意味を考える（1）隠喩とイメージ』夏目書房

天野みどり（1990）「複主格文考」『日本語学』9-5、東京：明治書院、pp.285-303

天野みどり（1995）「「が」による倒置指定文―「特におすすめなのがこれです」という文について―」『新潟大学人文学研究』88　新潟大学

臺灣大學學術期刊資料庫

NTU Studies in Japanese Language and Literature

No.33 June 2017

Contents

Mei-yao Chen	Sex and Violence in Women's Hard-boiled Fiction: Kirino Natsuo's *Out* As An Analytical Text	1
Yi-yun Wang	A Study of the "Issue Literature"（Mondaibunge）and Writers of the Waseda Group on the Relationship to Japanese Naturalism	29
Masashi Saito	"Saigu(;a maiden in the service of a Ise shrine)" of "bamboo" and "Princess" of "the moon"- "The Tale of Taketori" allusion of "the Tales of Yamato"-	49
Chin-chang Yang	Of Uta and Monogatari in The Tale of the Heike With a Focus on Volume 1 "Shishigatani"	65
Tsui-O Huang	Tokutomi Soho's perspectives and memories of Taiwan: A discussion using *The Taiwanese Sojourn*	81
Tzo-i Ho	Study on "*Seihintan*" by Osamu Dazai ― Correlation between the Rewriting of Characters and the Situation in East Asia at the Same Time ―	103
Hui-jun Lin	About The Loanword Base in Japanese	127
KURODA Hidenori	Confucian that does not necessarily believe in all classical writings: Perspective of Riken Nankai on classical writing	149

臺灣大學學術期刊資料庫